

# イブン・ファドラーンの視線

——一〇世紀北西ユーラシア史の中の  
スカンディナヴィア系集団

小澤  
実

Ozawa Minoru

## はじめに

『ジュラシック・パーク』で著名なアメリカの人気作家マイケル・クライトン（一九四二—二〇〇八）は、一九七六年に『死者を喰らう者たち (Eaters of the Dead)』（邦題『北人伝説』）という小説を世に問うた。一九九九年には『サーティーン・ウォリアーズ』（原題は『三人目の戦士』[*Thirteenth Warrior*]）という名前でハリウッド映画化されたので、知っている人もいるかもしれない。時は西暦一〇世紀、ユーラシア大陸北方の選ばれし勇者たちが、占い師の予言に従い、一三人目の戦士であるムスリムを連れて、霧の中からあらわれては人間を喰らう謎の集団と戦うという冒険活劇である。

ここで言う選ばれし勇者とは「北人」、ルーシとも呼ばれるスカンディナヴィア人である。一〇世紀と言う時代背景を考慮するならば、ヴァイキングという呼称のほうが馴染みあるかもしれない。本作は、故地を離れヴォルガ河畔に野営する彼ら「北人」のもとを訪れたムスリムの視点で物語られている。アントニオ・バンデラス演じるこのムスリムの名はイブン・ファドラーン。大方がフィクションを占めるこの作品にあって、ファドラーンとその記録は現実のものである。

## イブン・ファドラーンの記録

七五〇年に成立したアッバース朝は、要害の地バグダードを首府とし、中東に政治的に安定した時代を現出せしめた。

バグダードの歴代カリフは、統治システムや経済政策に力を注ぐと同時に、バグダードを当代随一の知の集積地にせんと、各国語の古典から新知識まで貪欲に求めた。空間認識の拡大もその一つであった。この王朝に重なる西暦九世紀から一〇世紀にかけて、イスラーム世界は「地誌記述の古典時代」と言われる。イブン・フラッタードビ、マスウーデー、ムカッスィーといった著名人が、数多くの地誌を記した。

イブン・ファドラーンもそのような記述者の一人である。

西暦九二二年六月二一日（ヒジュラ暦三〇九年サファル月二一日）、彼はカリフ、ムクタディル・ビッラーフ（在位九〇八―九三二年）の命を受けて、北方のブルガール国に向かう使節団の一員として、バグダードを離れた。ホラーサーン街道からボハラを経由し、さらに北上、出発より一年弱後の九二二年五月二二日、目的地であるブルガール王アルミシュ・イブン・ヤルトワールのもとに到着した。ファドラーンの生涯について詳しいことはわかっていないが、ブルガール王の面前でカリフの書簡を読み上げ、しかる後に王との折衝を担当したことから、バグダード宮廷の中でかなりの高位にあったことが推測できる。

『旅行記』は六章からなる。第一章は旅の目的を、第二章はバグダードからアラル海とカスピ海に挟まれた要害の街ジュルジャーニーヤまでの旅程を、第三章は旅程で見聞したト

ルコ諸部族の風習を、第四章は目的地であるサカーリバ、つまりブルガール国の事情を記録している。第五章と第六章は旅の途中で見聞した異文化の記録であり、前者はイティル（ヴォルガ）河畔で商業を営んでいた「ルーシ」の集団について、後者はユダヤ教君主をいたたくハザール国について記録している。他に比すべき記録がないということもあり、いずれの章も一〇世紀北西ユーラシア世界の動向と風俗を知るにあたって第一級の情報源である。

私たちにとつて重要なのは、このディルハム貨やディナール貨を扱う「ルーシ」を記録した第五章である。全部で六節からなり、第一節では彼らの服飾を、第二節では衛生を、第三節では女奴隷の扱いを、第四節では信仰を、第五節では葬送慣習を、第六節は王宮の構造を記述する。いずれの節も同時代のルーシの生活の様々な面について大変興味深い情報を与えてくれるが、ここでは第五節の葬送慣習に限定し、より詳しく見てみたい。

### ルーシによる葬送儀礼の記述

この葬送場面は、古スカンディナヴィア世界の研究者によつて、以前から注目された箇所でもあった。というのも当該箇所こそが、船の上に遺体を安置して火葬する船葬を描写する唯一の文字史料だからである。船葬はスカンディナヴィ

ア世界に独特の葬送慣習であると考えられており、ヴァイキング時代以前の鉄器時代を中心に、かなりの数の遺構がスカンディナヴィア本土で発見されている。オスロのヴァイキング船博物館に陳列されている美しい三隻のヴァイキング船（ゴクスタ船、トゥーネ船、オーセル船）も、実はこの船葬の遺構である。海洋と向き合うことで育まれたスカンディナヴィア文化の象徴でもある船葬墓は、本土以外でも、イングランドのイーストアングリアにあるサットンフー、ブルターニュのグロワ島、ドニエプル沿岸のグニョズドヴォオなどでも発見されている。

ファドラーンの滞在中、たまたまこのルーシ集団の貴人のひとりが死んだ。ファドラーンは葬送儀礼の場に立ち会う機会を得、通訳を介してその一部始終を観察することが可能となった。このように彼の記述は実体験に基づいているため、極めて精彩に富んでいる。ここではこの葬送を三段階に分けて再現してみよう。登場人物は、犠牲となる女奴隷、「死の天使」と呼ばれる老婆、老婆の娘である二人の「女奴隷」、死者の「最近親者」、六人の男たちである（なお、訳語は家島彦一氏の翻訳に依拠する）。

① 葬送の前日まで

死者は、いったん仮の墓に安置され、酒、果実、タンブール「楽器の一種」が供えられる。死者の親族は、「死の天

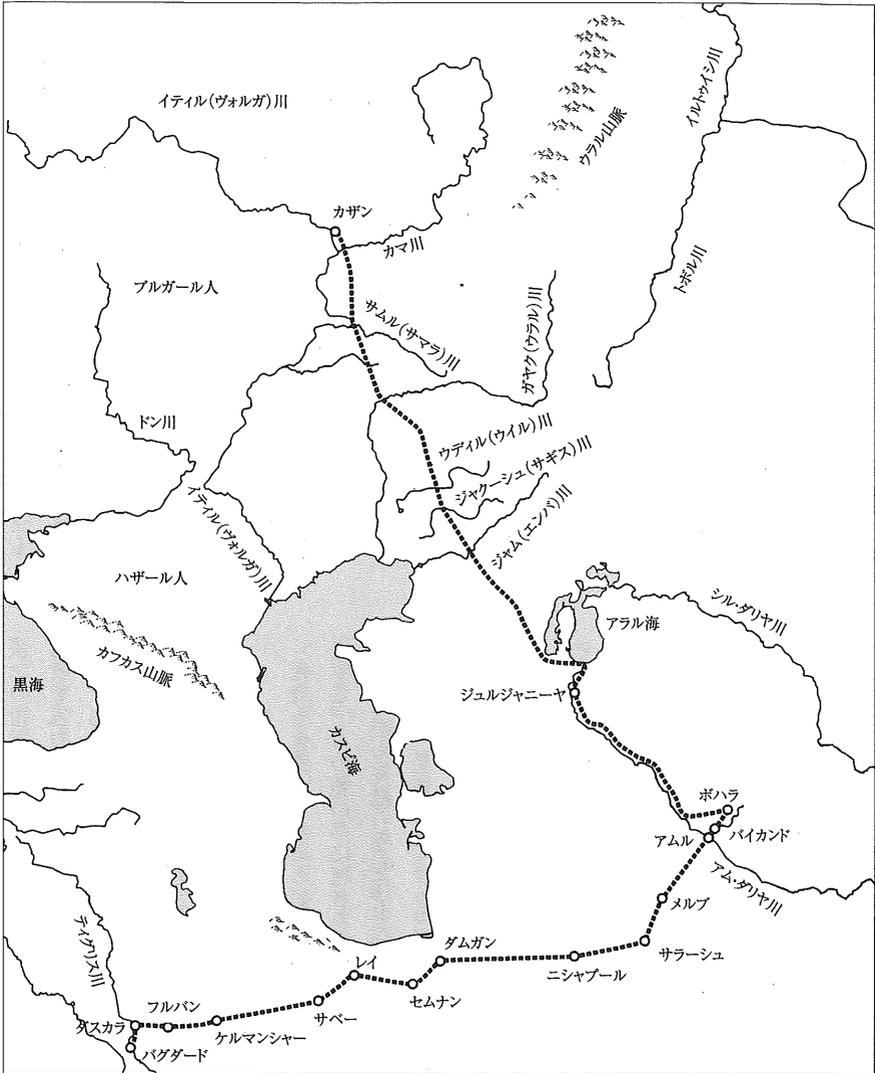
使」の指示に従って、葬送の準備をする。すなわち一方では、死者を包むための死衣を縫い上げ、葬送に必要な品々を用意する。他方では、死者と共に葬られる女奴隷を募る。その女奴隷は葬送の当日まで、酒や歌で享楽の限りを尽くすが、その際、「死の天使」の娘である二人の「女奴隷」が身の回りの世話をする。

② 火葬当日

死者を火葬するための船を、陸にくみ上げた足場の上に固定する。この船の中に死者を横たえる台座を設置し、それを「ルーム製の錦織の座布団と枕」でくるむ。そこに「ズボン、ゲートル、長靴、クルタクと金ボタン付きの錦織のハフターン」を着せ、「黒テン皮付きの錦織の帽子」をかぶせた死者を横たえ、酒、果実、芳香性の果物を供える。

その後まず、パン、肉、玉ねぎを死者の前に置き、しかりのちに犬一匹を半裂きにして船内に放り投げる。さらに生前死者が用いた武器を死者の傍らに置き、「汗が出るほど駆けさせた」二頭の馬、二頭の牝牛、雄鶏と雌鳥を斬り殺して、やはり船に投げ入れる。

共に葬られる予定の女奴隷は、親族たちの各テントを訪れ、そのテントの主人と交わる。テントの主人は彼女に対し、「汝のご主人にこう言いなさい。「私がこのように行うのも、ただただ汝への親愛の気持ちからなのです」と言う。



イブン・ファドラーンの旅程

## ③ 火葬直前

組みあげられた門の枠組みのようなどころに連れてこられた女奴隷は、男たちの掌にのつてその枠組みから身を乗り出し、三度言葉をつぶやく。一度目は「おお見えます。我が父と母が」、二度目は「おお見えます。我が先祖代々のかたがたがお座りになられているのが」、三度目は「おお見えます。我が主人は天国にお座りになられている。天国は美しく、緑なり。あの人は、人々や従僕たちと一緒におられ、私をお呼びになられている。ですからどうぞあの人のもとに私を連れて行ってください」である。

その後、女奴隷は雌鳥の頭を刎ね、それを男たちが船に投げ入れる。船のそばに連れてこられた女奴隷は、身につけていた二つの腕輪を「死の天使」に、二つの足輪を世話係であった二人の「女奴隷」に与える。船に乗せられた女奴隷は、男たちから渡された酒盃を鼻歌交じりに空け、もう一杯受け取ると長い間歌を唄う。男たちが棒で楯を打ち鳴らす中、「死の天使」が女奴隷に酒を飲ませ、彼女を船に設えられたテントの中にいざなう。

六人の男がテントの中でこの女奴隷と交わる。その後、彼女の両足を二人の男が、両手を二人の男がつかみ、「死の天使」が彼女の首に縄をかけ、残り二人の男にその縄を引くように命じる。その後「死の天使」は、女奴隷の胸に短剣をつ

きたて、死に至らしめる。女奴隷の遺体は主人である死者の傍らに置かれる。

死者の「最近親者」が、裸のまま、片手には火のついた棒木を持ち、もう片手は尻に置いた状態で、船に背を向けて後ずさりしながら船に近づき、船の下の棒木に火を放つ。ひき続いて点火棒を手にした人々が、それを次々に船の下の棒木に投げる。すべてが燃えつきた後、船のあった場所に「円形の丘に似たもの」を作り、その丘の真ん中に白樺の大木を植える。そしてその木に死者の名前とルーシ王の名前を刻む。

さて、以上がファドランの伝えるルーシ集団のある貴人の葬送儀礼に関する記述である。私たちは、彼の細密な観察眼に感嘆するとともに、その記録の持つ生々しさにショックを受けるかもしれない。美しい衣を纏うきらびやかな死者、次々に斬殺される犠牲獣、複数の男たちと交わる女奴隷、そして縄と短剣を用いたその女奴隷の殺害、生命を失った遺体が並ぶ船への集団放火といった印象的な光景が次々に描き出される。「文明人」ファドランの目には、異教の蛮人の野卑な風習と映ったがゆえに、記録映画のように詳述したのかもしれない。

## ヴォルガ河畔のルーシ集団とエトノジェネシス

ファドランが記述したルーシという民族集団の起源は、

ほぼ間違いなくスカンディナヴィア人である。この時代のスカンディナヴィア人の一部はバルト海を超えて東方へと向かい、ウラル山脈の西方から黒海沿岸にまで、その活動範囲を拡大した。有力な首領たちを中心としたいくつもの小集団が、ヴォルガ水系とドニエプル水系をさかのぼり、極寒の地に足を踏み入れた。スカンディナヴィアの遺品の発見されるスタラヤ・ラドガ、グニョズドヴォ、ポリシヨエ・チメリヨヴォといった遺構群や、「東方」で死んだ者を讃えるスウェーデンのルーン石碑は、北西ユーラシアに展開したスカンディナヴィア人による活動の痕跡である。

こうした東方移住者の中には、九世紀のリユーリクのような、現在のロシアの起源となる国家の礎を築いたと言われる伝説的な首領もいた。このルーシの起源をめぐって、かつて激しい議論がたかかわされた。スカンディナヴィア人説をとるノルマンニストと、スラブ人説をとるスラビストの論争である。しかしながら、現在において、ナシヨナリズムが後押しするこの二者択一的な論争に意味を求める研究者は少ない。一つは、すでに述べたようにヴォルガ水系とドニエプル水系の各地でスカンディナヴィア人の存在を匂わせる遺構や遺物が次々に発見されていること、もう一つは現在の民族指標を過去のそれに当てはめようとする、史料上の用語の内実を考慮しない過激的なエスニシティ理解が、学問的妥当性を失っ

たことが理由である。北西ユーラシアに展開したスカンディナヴィア人は、世代を重ねるにつれ、現地の諸要素を取り込みながら、出身地であるスカンディナヴィア半島の人々とは異なる新しいエスニシティを築き上げた。社会学者が言うエトノジェネシス（エスニシティ創生）である。

ファドラーンの伝えるルーシ集団も、そうした新しいエスニシティの分枝であると考えられる。それはファドラーンの葬送儀礼の記述からもいくらか伺える。死者に供える「酒、果実、タンプール」や「酒、果実、芳香性の果実」とある。酒はともかく、スカンディナヴィア世界で入手できる果実とヴォルガ河畔の果実は異なるし、「タンプール」や「芳香性の果実」にいたっては、本土ではほとんど入手不可能であっただろう。「ルーム製の錦織の座布団と枕」とある。「ルーム」とはビザンツ帝国を指すが、高価なビザンツの織物を手でできたのはこのルーシ集団がビザンツの産品が行き交うルートで商業を営んでいたからであろう。「天国は美しく、緑なり」と女奴隷は言う。いったいスカンディナヴィア人の死生観に、美しく緑なる「天国」などあったのだろうか。植えた白樺の太木に死者と王の名前を刻ませたとある。ここで刻んだ文字はスカンディナヴィア人特有のルーン文字であったかもしれないが、本土の貴人であれば両者の名前は白樺ではなく石碑に彫らせたであろう。

船葬という骨格そのものはスカンディナヴィア起源で間違いない。しかしその葬送儀礼の道具立てや意味づけは、ルーシ集団が現地社会に馴染んでいく過程で徐々に変化を遂げている。とりわけ、イスラーム銀やビザンツ産品といった文明のシンボルの中に身を投じたこのヴォルガ河畔のルーシ集団は、スカンディナヴィア世界、ビザンツ世界、イスラーム世界という異なる文明圏を越境する存在として、私たちの前に立ち現れる。ファドラーンの記述に対して、かつてのようにルーシの本質は何かと問うよりも、このルーシ集団はどのようなコンテクストに置かれ、本土のスカンディナヴィア人とどれほど差異化していたのかと問うほうが、歴史学として生産的ではないだろうか。

### さいごに

すでに見たようにファドラーンの記録は、一〇世紀のルーシ集団の風習を知る上で比類なき価値を持つ。しかしながら、その真の史料的価値を引き出すためには、幾重にもかけられたバイアスという鍵と格闘しなければならぬ。そもそも『旅行記』の記述は、ファドラーンのムスリムとしての価値観と個人的関心に基づいて、意識的または無意識的に情報が取捨選択されていること。この時代のアラビア語地誌の多くがそうであるように、『旅行記』もまた、本人の見聞と伝聞

が同じ土俵で論じられていること。ヴォルガ河畔のこのルーシ集団は、たしかに船葬というスカンディナヴィア独特の埋葬慣習を堅持しているように見えるが、そのプロセスがスカンディナヴィア本土で行われていた慣習からどれだけ隔たっているのか確認するのが困難であること。さらに商業のためにヴォルガ河畔までやってきたこのルーシ集団が、ルーシ全体をどれだけ代表できるのか不確定であること。

過剰な疑念で認識論の隘路に落ち込んで学問の進歩はないが、準備もなく史料の記述を鵜呑みにするのも危険である。証言のバイアスを一つ一つ取り除きながら、よりもっともらしい解答へと近づいていかねばならない。初期スカンディナヴィア史は、どのようなテーマを選んだとしても、伝統的な一つの方法論だけに依拠することが困難な分野である。ファドラーンの記述を評価するためには、伝統的なスカンディナヴィア学の知見に加えて、アラビア史料学、ロシア考古学、東方地域の古銭学、ロシア民俗学といった、ほとんど未開拓の分野への訴求が必要となるだろう。

実のところ、ルーシ集団の動向を伝えるアラビア語史料は、ファドラーンの『旅行記』だけではない。ハリス・ビルケランのアラビア語史料抜粋集には、従来のスカンディナヴィア中世研究ではめつたに参照されない記述が収録されている。これを適切に利用できたなら、ラテン・カトリック圏、ギリ

シア・正教圏、アラブ・イスラーム圏をつなぐ位置にあるスカンディナヴィア世界の歴史解明に、少なからぬ貢献ができればならない。北西ユーラシア世界に展開したスカンディナヴィア人の研究は、困難ではあるが今後大きく開拓の余地のある分野である。

参考文献

家島彦一訳註『イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、一九六九年。

角谷英則『ヴァイキング時代』京都大学学術出版会、二〇〇六年。

マッツ・G・ラーション(荒川明久訳)『悲劇のヴァイキング遠征 東方探検家イングヴァールの足跡一〇三六一〇四一』新宿書房、二〇〇四年。

Holger Arpman, *Seear i österväring*. Stockholm: Natur och kultur 1955.

Harris Birkeland, *Nordens historie i middelalderen etter arabiske bilder*. Oslo 1954.

Simon Franklin, *The Emergence of Rus, 900-1200*. Harlow: Longman 1996.

Richard Frye, *Ibn Fadlan's Journey to Russia. A Tenth-Century Traveller from Baghdad to the Volga River*. New Jersey: Markus Wiener Publishers 2005.

Michael Müller-Wille, "Bestattung im Boot. Studien zu einer nordeuropäischen Grabstätte", *Offa*, 25-26 (1968-69), pp. 1-267.

Anne Stalsberg, "Scandinavian Viking-Age boat graves in Old Rus", *Russian History/Histoire Russe*, 28 (2008), pp. 359-401.

Sigé Wikander, *Araber, vikingar, varingar*. Lund: Svenska Humanistiska Forbundet 1978.

(名古屋大学グローバルCOE研究室)

スカンディナヴィア中世史

